

# アガペ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2015年5月21日発行 第1号)】

(事務局・仁木町大江2-457 大江学園内 0135-32-3662)

【社会福祉随想リレー】

## 社会福祉に関わった21年の軌跡

学部34期(1990年度卒) 高島 史図

社大を卒業して、早21年が経ちました。社大北海道同窓会に仲間入りさせていただいて、21年ということになります。ちなみに私の妻も同窓生であり、学部37期(1993年度生)です。

私は、北海道岩見沢市で生まれ、札幌市白石区、札幌市東区、白老町、千歳市と道内を転々とし、その後千葉県民と東京都民を体験しました。故郷に思いのあった私は、社大を卒業したら、「社会福祉で飯を食うなら故郷で!」「せめて津軽海峡から北で働く!」などと心に決め、社大4年生の時に、道内で職を探しました。殊に大橋謙策先生のゼミ生でしたので、当時は「故郷で地域福祉を!」との思いを持って、社協を中心に就職活動をしていました。

1994年4月に、社会福祉法人美唄市社会福祉協議会に入局しました。美唄市社協に勤めてからは、ぼけ老人(当時はまだ、「認知症」という言葉がありませんでした)を抱える家族の当事者団体の事務局を担当し、「Support but no control」を意識しながら、組織の自立と当事者への支援を行っていました。また、ボランティアセンター担当となり、一番熱を入れたのが除雪ボランティア活動でした。「雪が降れば降るほど、ボランティア活動が盛んになるまち」を自分の目標にしていたのを思い出します。みんなが嫌がる雪ですが、忌み嫌われる雪のおかげで市民活動が盛んになり、支え合いのシステムの一助となり、子どもたちへの社会福祉教育となればいいなあ、と考えて取り組んでいました。その他、食事サービスで配食をしたり、昼食会を開いたりし、更にそうした方々にはボランティアとして関わってもらいました。また、移送サービスや車両貸出事業も担当するなど、色々なことに携わっていたのを思い出します。

2002年からは、美唄市社協が運営する「びばい社協かがやきデイサービスセンター」(通所介護・介護予防通所介護・基準該当生活介護)で生活相談員やケアワーカーなどを務め、2012年には同施設の管理者となりました。

通所介護で自分の武器となったのは、長年実践してきたレクリエーションのスキルでした。殊に民謡をやっていたおかげで、民謡レクを実践することができ、利用者にはなかなか好評でした。

その後、大きな手術を受け、体調を崩したこともあって、2014年には20年間務めた美唄市社協を退職しました。

術後のリハビリで一緒に頑張った患者仲間や病室仲間との出会いがあり、様々な状況や思いを聴く中で、患者に寄り添う仕事に関わりたいと思うようになりました。昨年4月から半年間の期限付き嘱託職員で、北海道中央労災病院のMSWを務めました。短い期間の中でも、医者や看護師、看護助手、PTやOT、診療情報管理士、医療事務の方々等と様々な遣り取りがあり、病棟カンファレンスや患者及び家族との面談、ケアマネや事業所との調整、退院後の入所先の調整など、非常に密度の濃い半年間でした。ただ医療機関で社会福祉の立場からアプローチをするMSWは、その役割の認知も立場の確立もまだまだ難しいなあ、と感じました。

そして、昨年10月からは、美唄市内にある社会福祉法人北海道光生会が運営する福祉型障がい児入所施設「美唄学園」で、児童指導員（嘱託職員）をしています。知的障がいや発達障がいのある子どもたちと向き合い、毎日、試行錯誤しながら働いています。宿直勤務もあり体力的にかなりシンドイものの、色々勉強になります。それぞれの利用者の個別の特徴が解るまでは、しょっちゅう殴られて眼鏡を壊されたり、物を投げつけられたりなど、生傷が絶えませんでした。慣れてきた今であっても、支援の仕方は本当に毎日手探りだというのが実感です。

知的障がい者や発達障がい者が入所し、集団で生活する施設に勤めていると、社協職員時代に良く聞いたスローガン…自分自身もよく使っていた言葉、「住み慣れた地域で共に暮らす」、「利用者の意志の尊重」が遠く絵空事のように感じる時があります。住み慣れた地域で暮らすためには、あまりにも多くの壁があります。利用者本人の意志に添わず、入所しなければならない子どもたちもいます。

今の思いとしては、自閉症やADHD等の発達障がいのある人たちや知的な遅れのある人たちについて、一般市民が偏見を持たずに理解してほしいし、家族の中にそのような特徴のある人がいる世帯への支援をより手厚くしてほしい、また彼らの特徴を受け入れて可能な限り良い部分を活用・登用できる企業が増えてほしい、笑顔で暮らせる地域社会であってほしい、と思っています。社協職員時代にそこまで踏み込んで取り組めなかったのは、今になって悔やまれます。

徒然なるままに自分の21年を記しました。今回、本稿を書く機会をいただき、駄文ながらも、自分を振り返る良い機会になりました。

世の中、景気も実感としてはまだまだ良くはなっておらず、財政赤字も続いています。金の切れ目が縁の切れ目で、削減縮小されたり我慢しなければならない分野もあります。制度も報酬も整理の仕方や単位がコロコロ改定され、そ

のたびに利用者・家族や現場は振り回されています。

そんな中、自分の小さな力で、職場で、地域で、今できることは何か、大切にしなければならないことや子どもたちや周りに伝えていかなければならないことは何か、ということをお忘れのないようにしたいと思っています。

社大同窓会は元気をもらったり、原点に帰れる場所です。社大の校歌を歌うとあの頃の自分の思いや仲間たちと学んだことなどを思い出します。今後ともできるだけ社大同窓生のみなさんにお会いできればいいなと思っておりますので、何とぞよろしく申し上げます。

## 地方同窓会活動に思うことなど…

日社大総務部校友室長補佐 畑戸 健太郎

北海道の同窓会のみなさまにつきましては、日頃、同窓会活動に多大なるご協力をいただき誠にありがとうございます。

母校・日本社会事業大学は、創設以来、15,000人以上の卒業生を輩出し、来年は創立70周年を迎えます。

同窓会についても、昨2014年には、同窓会の役員及び組織が大橋会長のもとで一新され、これまでの取組みに加え、新たなる検討及び実施がなされてきております。

その中で最重要視されているものが、地方同窓会の活動強化です。

昨年度は、みなさま方の同窓会組織である北海道支部をはじめ、秋田、福島、愛媛などの各地方支部でのセミナー活動が活発化してきています。いずれも有意義な活動内容であり、おのおの盛況のうちに無事終了しました。

北海道支部の同窓会活動については、新春セミナー及び秋季セミナーと、少なくとも年2回の活動が40年近くに亘って継続して実施されております。これは、地方同窓会での理想的な形であり、全国に広めていくべき実践ではないかと、常々感服しているところです。

このような活動は、各地方支部の方々が日頃から、自発的、積極的に同窓会活動に取り組んでいただいていることの成果であり、それらの努力が着実に拡がりを見せているものと言えます。同窓生のみなさまが自主的、自発的に参加していくことが、同窓会の裾野を拡げていく唯一の方法である、と考えています。したがって、われわれ母校の教職員もまた、こうした取組みに学びながら、自らの役割をしっかりと果たしていきたいと思っております。

例え、どんなに小さなイベントであったとしても、同窓生が集まって昔話に花を咲かせるなどの環境作りをしていかれるようにするために、そのお手伝いをしていくことが母校同窓会事務局、つまりは校友室の責務であると考えています。同窓生のみなさまはおそらく、「みんな集まれ～」という大義名分がありさえすれば、昔のお仲間たちと集い合い、語り合いたいと期待しているでしょうし、昔の仲間とあれこれ集うことで、青春の日々を思い起こすことも可能

となってくるのではないのでしょうか。

ただ一方で、北海道支部のような理想的な同窓会活動をしたいけれど、「なかなか難しい」という地方支部があることも事実です。また現在は様々な情報ツールが発達し、集まるきっかけも作りやすくなってはいるものの、その反面、同窓会活動自体に参加する同窓生は、残念ながら減少傾向にあるのも事実です。

したがって校友室としては、このような現実をリアルに踏まえながら、同窓会活動の原点である「地方同窓会活動を通じて、母校同窓会が今後とも発展していく」ことができるようなお手伝いができれば良いと考えています。

「私学」のなかでも、日本社会事業大学は学びの内容や志が、「社会福祉」というしっかりとした色と形を持った大学です。だからこそ、社会福祉現場等における悩みや考え方も共通する同窓生が多いのではないのでしょうか。つまり、他の大学と比べれば、同窓生が集いやすい要素は充分にあるわけです。

本学自体の発展のためにも、地方同窓会活動がこれまで以上に活発となり、それに校友室が主体的に協力していかれるよう今後とも努めてまいります。校友室としては、支部同窓会、また同期会の開催等については、それなりのノウハウを持っております。そういう意味では、もっともっと校友室をご活用いただけますようお願いいたします。

そして、みなさま方のさらなるご指導、ご鞭撻を今後ともよろしく願いまするものです。

(秋季セミナーにも是非、お声を掛けてください。お役に立ちたいと思っています！)



## 「野村健さんと偲ぶ会」について

前号でお知らせしたとおり、「我が北海道同窓会は健さんで持っていたようなもの」であることから、健さんの足跡を辿り、健さんの業績に学ぶ中で、北海道同窓会をさらに発展させていこうということで、企画を推進してきました。

しかし、関係者間の調整が仲々つかず、今回はやむなく見送らせていただくこととしました。せっかく期待していた方々には大変申し訳なく思っています。

ともあれ、北海道同窓会としては、健さんの功績を再確認する中で、諸先輩と若い世代を繋ぐ同窓会活動を今後も推進していきたいと考えています。今後とも、ご協力を何とぞよろしくお願い申し上げます。



## 【社会福祉随想リレー】にもご協力を

「アガベ」を通じて、同窓会員の交流を強化するため、標記を連載化していきます。「書いてください」とお願いしたときは、「ハイ、解りましたよ」と快いお返事をくださいネ。